

京鹿子



1月号

京鹿子祭特集号

豊田都峰
叡林集 その一



国つ神斎ける千木へ山粧く
朝霧のこぼれ光るを悼みとす
フラミンゴ十歩かぎりの秋うらら
石仏の眉目は朝のむら時雨
鴨づつみしぐれにじみの灯をひろふ
草の穂のさゆれ夕灯遠くする

里宮のほひぶくろの花
柎
うぶすなに花ひひらぎのこぼるる日
風を聞く穂草のあたり村ざかひ
山の日の雑木もみぢに酔ひはじむ
木の葉散るその時空の青かりき
里山は月夜つづきに木の葉降る
木戸たたたく木の葉まじりの夜の風
木の葉散るかくてすぎゆくことばかり

秀華採集

ひぐらしのページは痛い白のまま

直江裕子

「ひぐらし」の声は思い出を誘う。思い出を「白いページ」として「痛い」とするところに青春のころの心が滲む。せつなさが滲む。「ひぐらし」のひとつの典型を具体化している。

晩秋や机の上の砂時計

永岡享子

夕暮の甘さに惹かれつくつくし

林達男

前句の「晩秋」と「砂時計」の組み合わせがよく、後句の「甘さ」と言い切った点が驚き。

鈴鹿 仁

枯蓮

朝もみぢ序として涌きし詩ごころ

一善として枯蓮の極みなる

短日や不意にひとりの走り出す

—追懐—（その五）

人は悔人は笑べり大かりん

〔昭和六十三年作〕

寡黙せしことも意のありかじけ鳥

〔平成三年作〕

近 詠

和田 照海

落し水

平家谷かかれば虫のまんじ鳴き

蕎麦はぜの脚の太さも平家ぶり

鬼の子の風にも敏き平家谷

隠し田のいざなひごころ威銃

隠堂畳を拭いて月を待つ



神麓集

小夜時雨 藤岡紫水

露座佛を音なく洗ふ小夜時雨
暮れ早や山路にひそと実むらさき
まうしろは何もない空石榴の実
立つ影も佇む影もみな小春
枯芦に吹く風枯れて出でゆけり

時雨虹 松本鷹根

散る紅葉急くことはなし石に坐す
門院陵の白ド砂青松冬に入る
裸木の聳え促す空青し
魼の沖時雨の雲が陽を零す
傘傾げ仰ぐ比良には時雨虹

松田都青

先つぼの好きな蜻蛉の自閉症
包帯が嫌いな傷は秋が好き
父と言ふ高さのわかる敬老日
天国の真正面だよ夕焼ける
燕帰る一羽一羽に車間距離

皆既月蝕 北川孝子

菊今宵この世の過客として老ゆる
暮れ方の寂をまとひて塔の秋
ゆつくりと猫裏返る草ひばり
濃く淡く面影を追ひ萩今宵
皆既月蝕人間ひとへにうそ寒し

南天の実 丸井巴水

南天の実や置石の貌決まる
川なかば鹿の四つ足鏝つかず
稲妻や一瞬消ゆる読書の燈
イカ墨の pasta 港の霧迫り
南天の実の重たさや裏鬼門

カサブランカ 塩貝朱千

秋蝶やそはかと師碑に迎へらる
秋風や師の囁きに耳凝らす
カサブランカわが生涯に二人の師
やはらかに句碑を彩どる風すすき
秋ふかむ連理の句碑と夫婦墓

京鹿子大賞受賞作品

京都市

鈴鹿けい子

番人のめがねのくもる青葉木菟

もういくつねむると白いまんじゆしやげ

ひぐらしの語尾の省略うすずみに

密約の雁の玉章ぬりつぶす

略図のやうな砂漠め遺跡星月夜

昔日の堰切つて黄葉ふりしきる

秋蟬や自問自答のくぎりつけ

こめかみに耳の字三つ軋む秋

三枚におろし散らばる秋の雲

歳晩や磨き残しのある齡

深井面は門外不出のちの月

冬ざれて慕ひし影を見失ふ

当面はぬれ衣を着る枯蓮

風聞をそらしてをりぬ虞美人草

捌け口が見つからなくて冬ざるる

ひたすらに紅閨を編む女郎蜘蛛

盗聴を決め込んでゐる冬の蜘蛛

打ちつ放しのビルに同化や走り梅雨

脈診によよと溶け出す雪女郎

まどろみの指のさめゐる河鹿笛

成長痛を剥がしてをりぬ今年竹

河骨や踵をあげて風を詠む

をがたまの花は吉方つかさどる

ねむれずにくぐもる魚と梅雨の月

花ミモザ縁取りひかる封緘紙

ががんぼや弱音を吐けばばらばらに

病葉や指紋剥離といふ次第

負の連鎖も神の手の内はしり梅雨

夕ざくら気はむらさきの淵に棲む

ひとおよぎ蛇は女人へもどりゆく

京鹿子新賞受賞作品

京都市

澤近 栄子

七夕や枕に聞かす私小説

ロザリオといふ名の葡萄おもてなし

首塚や振れば鳴りさう蝉の空

いも掘の親指ほども数に入れ

ひまはりやすこし遅れて廻るくせ

残る蚊に刺されてははず婚指輪

秋夕焼かもめのやうな街跡灯

名刹の昼の行燈秋惜しむ

秋思曳く石灯籠の市女笠

石山や月に帰心の夕鴉

バイキングの皿の重さよ秋うらら

たましひの鼻から抜けてうかれ猫

エンディングドレスは黄いろ冬の蝶

待ち合はせもしや待ち伏せ恋の猫

切れの良いお国訛りやふぐの鱈

七転び八起きは不得手雪だるま

絵画売る天才奇才文化祭

瀬田しじみ父郷母郷は西東

赤い羽根啣へて青い鳥が翔つ

望楼や安土姉川風光る

書初の馬の字サラブレッドかな

藤棚に神代にさそふ風を待つ

ウインクは性に合はない福達磨

ジャンクシヨン過ぎて逃げ水加速する

三面の一つ妣かも初鏡

草刈つて鴉にお辞儀してもらふ

千代の春青と赤毛の出世駒

乳歯抜け口に涼しき風吹くと

京鹿子新賞受賞作品

福山市

藤井 杏愛

空事へ頷く背に霧匂ふ

冬ざれやうしろ姿にまかせおく

何も彼も沈めて海は秋になる

鉛筆の芯欠けてゆく冬はじめ

月涼し波音の降る里の世

古里は海から暮れて山眠る

修羅を知る月の眼を誘ひぬ

気にすれば気になる月の北枕

浜木綿の咲きつぐ里に眠りたい

小春日や吾子の瞳の万華鏡

ともかくも話す相手のゐる冬日

小春日を両手で掬ふ母の笑み

寒紅の言の葉よりも暮れなづむ

追憶のこだま残して夜半の春

虎落笛合点のいかぬことばかり

揺り椅子をとめて戴く春の月

初空や何故か亡父の下駄をはく

残り香をたたむ夕日の花杏

面影の時雨れてゆくや鞆の浦

夕日より色を授かる恋椿

水仙を探して雨の独り言

滴りのおはじきをする里の山

春の色こぼして浜に遊びけり

さよならを整へてゐる夜の秋

滲み出るペンの先から小夜時雨

春恋し行き先知らぬバスに乗る

折鶴を貴女に飛ばす冬灯

残心のありて古里月涼し

京鹿子新賞受賞作品

月ヶ瀬

上田由姫子

夏木立越えで広みの開墾地

里輪いま木槿紅白咲き満ちる

夕蟬や卒寿日課の畑廻り

盆僧のほか陰なし里ま昼

大粒の雨従へてはたた神

山あひを雲離れゆく男郎花

待宵草藪より風を集めをり

谷間の細き流れや萩の叢

少女らの弾ける笑顔縷紅草

木犀の庭にとどまるバイク便

ひと籠の間引き菜抱へ回覧板

鳥のこゑ消えしひととき雪解風

山裾の風のかたちに枯芒

道まつすぐ配達便の雪轍

長き夜や古書の翁のめでたけれ

春ともし溪の奥なる一軒家

祝宴の窓パノラマに秋の山

湧きてまた流れる雲や花こぶし

山眠るパステルの彩使ひきり

バス降りし一步に桜吹雪かな

夕凍みや風カラカラと裏返る

同窓の尽きぬ話や遠蛙

年惜しむ夫は寡黙に螺子を巻く

腕ほどのたかな抱へをんな去ぬ

溪一つ深く鎮まる冬の雨

植田みち里曲のあかり遠近に

大欠伸三日の空はまさをなり

姫女苑そよぎて山の風誘ふ

募集大作賞

京都市

山田和

一刀彫

新涼や能舞台なる足一拍
小面の細き声なる月明り
花すすき安土の風をはなさずに
焼け罅の天守の礎石雁のこゑ
墨の濃き城主の花押鹿威し
駒寄せの半ばは朽ちて酔芙蓉
秋の蚊の音なく刺せる閻魔堂

黄葉明り如来はまるき印結ぶ
秋深む木目となりし冥土の凶
日の短かうつぼかづらの落し穴
修羅曳きし杣のみちなり残る雪
雪被るキリシタン燈籠夕茜
初日影一刀彫の波頭
はるかなる御堂の燭り飢を挿す
起き上る竹の響や雪解光

募集大作賞

京都市

小山和男

朧 月

踏み込みの一步を磨く寒稽古
大佛に吸ひ寄せられい桜東風
鉛筆の片減りたどる蜷の道
なめらかな信条蛇が穴を捨つ
春愁や飛び石なかば立ち止る
名鐘は撞かず朧の月明り
花石榴町家の井戸に釣瓶なし

水無月や叱つてくれる人の減り
鬼灯の青さきのふと違ふ風
夏座敷コップ二つで足りる午後
短命は浄し無数の蟬の穴
白萩に隙なし抹茶すすりゐる
烏瓜つま先立ちの岩場越す
桐の実や飾り鎧の乾き切る
軋みなく門鎖す十三夜

双滴賞受賞作品

都峰 三賞

柳風櫂を忘れしだまし舟

山本 正

長考に入る破蓮の屯して

門馬貴美子

ポケットの硬貨桜草買えるほど

津野 洋子

仁 三賞

梅雨を待つ北山杉の息づかひ

吉田 愛子

土間涼し陣屋のくどに釜八つ

倉橋あつ子

裸木の樹にも自我あり影もあり

杉浦 満子

双滴賞

受賞作品

京都商工会議所会頭賞

大津市 鈴木 順子

少しづつ 煩惱捨つる 干大根

京都芸術文化協会理事長賞

京都市 仲井タミ江

遠き子へ夫の背幅に毛糸編む

京都府知事賞

大津市 田畑耕之介

京都新聞社賞

福山市 中島三喜子

寒 昴父は黙つてもものを言ふ

砂糖 壺一杯にして終戦日

京都市長賞

城陽市 松井 悦子

読売新聞社賞

京都市 岩木 雅子

泣きやまぬ嬰を汗ごと渡さるる

着ぶくれてだんだん大きくなる話

毎日新聞社賞

京都市 岡本 一路

京鹿子祭賞

福山市 北村 梢

男には男の日暮れ近松忌

打つたびに音のへこみし紙風船

朝日新聞社賞

京都市 藤本 純子

京鹿子祭賞

京都市 荒田 義枝

存命なら何論説かる花洛の忌

崩さねば何もおこらず冷奴

KBS京都賞

京都市 和田 うめ

京鹿子祭賞

長岡京市 高田 好子

引退を秘めて翁の祭笛

遠き日の鉄の匂ひや夾竹桃

NHK京都放送局長賞

京都市 藤岡 紫水

双滴賞

亀岡市 井上菜摘子

毒の字に何故か母ゐる茸山

あやとりの橋の裏側雪がふる

双滴賞

城陽市 鷺山 珀眉

はつ蝶のただ真つ白な一ページ

京鹿子祭賞

東京都 福島 照子

双滴賞

豊中市 村上 千紫

亀鳴くを待ちて晩成遠ざかる

朝寒や身にいくつかの蝶番



京鹿子集

豊田都峰選

ひぐらしのページは痛い白のまま

千葉 直江 裕子

さはやかと思へるほどに病む話

日付のない二人のための星月夜
すれ違ふ影はかりそめ秋隣

すれすれのたましひこんなに水澄んで

今朝の秋洗濯音まで快適に

罽雲時計と消せるボールペン

法師蟬市民講座は大盛況

晩秋や机の上の砂時計

荒尾 永岡 享子

受け答へ子等はそつなく秋うらら
家族からメール届きし良夜かな

まつさきの桜紅葉の二条城

秋の野に群れ咲く小花うす紫

りハビリの箸につままる新大豆

松茸や出張帰りの婿土産

ばばさまの昔かたりべ十三夜

冬隣り食べもの埋めて栗鼠懸命

夕暮の甘さに惹かれつつくし

京都 林 達男

朝寒や早起き出来ぬ居候

露草の明るい悲哀摘んでみる

朝寒や早起き出来ぬ居候

オハイオ 水谷 直子

アリソナ 伊吹 之博